

誤 訳

大 野 透

(1988 年 11 月 30 日 受理)

旧稿『『翻訳』考』(『国語学 139』1984)は、誤訳等を論じた部分を削除したものであるが、誤訳に就て改めて述べる事にする、翻訳の問題のある処、誤訳の問題もあるのである。誤訳は不注意・無知に由るのが普通であるが、意図的誤訳もあり得る。誤訳に就ては、紀要併載の「英語単語あれこれ」「森鷗外の語学力と作家活動」でも論じてゐる。

始に、Cicada 等の単語に関して述べ、次に諸家の誤訳の一端を指摘する事にする。日本は翻訳王国と言われるが、誤訳王国とも言はれ得る程で、誤訳は無数にあるが、以下、必ずしも日本人の誤訳には限定しないで論じる。動植物名の誤訳は殊に起り易いものの一つである。動植物は各国共通ではなく、又一般人には専門的知識が欠けるからである。

一般に、人は翻訳を読んで、原作を読んだと思ひがちである。原作と翻訳とは本来異質である事を真に知り、実感し得る人は少い。翻訳者は原作になるべく近いものを提供する義務が、原作者に対しても、世人に対してもある事を、肝に銘ずべきである。翻訳だけを読む人の外に、翻訳と原文とを対照して語学学習に資する事を望む人も多い事も忘れてはならない。

所論の対象は、単語では cicada, cigale, Zikade 等、訳者では、上田敏、前田晁、石井桃子、別宮貞徳、W. A. グロータース、柴田武などである。

引用辞書・事典類の略称を次に記す。外国書は引用順に挙げる。

OED=The Oxford English Dictionary, 1933

Johnson=A Dictionary of the English Language, 1755

Robert=Dictionnaire alphabétique et analogique de la langue française, 1967, 1977

Robert²=Le Grand Robert de la langue française, 1985

Littré=Dictionnaire de la langue française, 1877

DGLF=Dictionnaire général de la langue française, 1926

GLE=Grand Larousse encyclopédique, 1960-

LVS=Larousse du XX^me siècle, tome 2, 1929

Grimm=Deutsches Wörterbuch (von Jakob und Wilhelm Grimm), 1854-1984

Cobuild=Collins Cobuild English Language Dic-

tionary, 1987

COD=The Concise Oxford Dictionary, 1988

OALD=Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English, 1980

LDCE=Longman Dictionary of Contemporary English, 1987

WNWD=Webster's New World Dictionary of the American Language, second college Edition, 1980

CED=Chambers English Dictionary, 1988

Americana=Encyclopedia Americana, 1968

Britannica=Encyclopaedia Britannica, 1962

Webster=Webster's Third New International Dictionary of the English Language, 1976 *

Penguin=The Penguin English Dictionary, 1984

GEL=La Grande Encyclopédie (Larousse), tome 5, 1973

Wenig=(Chr. Wenigs) Handwörterbuch der Deutschen Sprache, 1906

Breuel=A New German and English Dictionary, 1906

OPD=The Oxford Paperback Dictionary, 1988

LASD=Longman Active Study Dictionary of English, 1983

小学大英和=小学館ランダムハウス英話大辞典, 1973

研究大英和=研究社新英話大辞典, 1980

木村相良独和=木村・相良独話辞典, 1940, 1963

相良大独和=相良独和大辞典, 1958

白水仏和=白水社仏和大辞典, 1982

小学仏和=小学館ロベール仏和大辞典, 1988

* 言語学大辞典 I (1988) 881 頁は、< Webster's New Third International Dictionary > に誤る。

一 単語

cicada, cigale, Zikade

イソップの「アリとキリギリス」の話は日本でも有名であるが、同種の話が天草本伊曾保物語(1593)では「セミトアリトノコト」、国字本伊曾保物語(現存最古本は1600年前後)では「蟻と蟬との事」と題されてゐる(此等はラテン語よりの訳。蟬のラテン語は cicada)⁽¹⁾。何故であらうか。イソップ物語の原文はギリシヤ語で、早く

ラテン訳があったが、各国語訳は一般にギリシヤ語乃至ラテン語の作品の訳乃至重訳である。問題の作品はギリシヤ語でも複数種あり、題名は蟬・蟻の順と蟻・蟬の順との二種があった。いづれにしても、蟬→キリギリスの変化が見られるわけであるが、和訳のキリギリスは英訳の grasshopper に由来するものに相違ない。英人は一般に蟬を知らなかったので、蟬を表すギリシヤ語 tettix, ラテン語 cicada (擬声語らしい) を grasshopper と訳するのが例であったので (現在ではギリシヤ語から直接に蟬と訳すものもある), 英語のイソップ物語では、例えば〈The Ant and the Grasshopper〉の如く grasshopper が用いられ、キリギリスと和訳されるに至ったのである。⁽³⁾ Liddle, Scott 編の A Greek-English Lexicon (1883) を Liddle が縮約して 1889 年に出版し、その後版を重ねてゐる An Intermediate Greek-English Lexicon は tettix を、

a kind of grasshopper, the cicala, Lat. cicada, an insect fond of basking on bushes, when the male makes a chirping noise by striking the wing against the breast,

と訳し、羽を胸に打ちつけて発声すると誤ってもゐる。OED は cicada の条で (ギリシヤ字をローマ字化),

Nearly all the species are inhabitants of tropical or the warmer temperate regions. Only one small species has been found (in the New Forest) in England. Called by the Greeks tettix, which, like cicada and cigale, is often erroneously rendered 'grasshopper'.

と註してをり、蟬は英国ではゐないと言ってもよい程であって、ギリシヤ語 tettix, ラテン語 cicada, フランス語 cigale (三語は蟬を本義とする) が屢ば grasshopper と誤訳されるとしてゐる。⁽⁶⁾ 1910 年初刊で、その後増刷を重ねた Woodhouse, English-Greek Dictionary は grasshopper を tettix と訳してゐる (cicada の項無し) のも参考となる。もと英国では tettix は grasshopper とのみ訳されてゐたのである。又ラテン語 cicada は grasshopper と訳されるのが普通であったので、⁽⁷⁾ 問題のイソップ物語の英訳に普通 grasshopper が用ゐられるに至ったのであるが、「アリとキリギリス」が〈The Ant(s) and the Grasshopper〉の如き英語 title に由来する事は確実である。

さて、鳴く虫は (a) コホロギの類、(b) キリギリスの類、(c) セミの類に大別されるが、西洋人はこれら、特に (a), (b) を必ずしも弁別してゐない (日本人でも (a), (b) を必ずしも弁別しない)。欧州では、(c) は一般に南部に限られてゐるので、南部以外では (c) を実際には知らない者が多く、(c) を (a), (b) と混同する傾向が強かった。これは誤訳の原因にもなり得るものであって、この事に就

て少し述べる事にする。

英語では、蟬乃至 (c) は cicada, cicala, cigala などと言はれる。後の二語はラテン語 cicada を語源とし、イタリア語乃至南仏プロヴァンス語に由来してゐる (cicala がイタリア語の、cigala がプロヴァンス語の普通の語形で、フランス語 cigale は後者より)。

OED は cricket に就て、

1. Any saltatorial orthopterous insect of the genus *Acheta* or of the same tribe;…… b. Used for CICADA. (Cf. BALM-CRICKET.)

locust に就て、

1. An orthopterous saltatorial insect of the family *Acridiidae* (characterized by short horns), esp. (……), the Migratory Locust, well known for its ravages in Asia and Africa;……

2. Applied to insects of other families. a. An orthopterous saltatorial insect of the genus *Locusta* (family *Locustidae*). b. A homopterous insect of the genus *Cicada* (family *Cicadidae*); e. g. the seventeen-year locust, *C. septendecim*.⁽¹⁰⁾

tettix に就て、

1. The cicada or tree-cricket, a homopterous winged insect: so called by the ancient Greeks, and hence in reference to Greece, Greek Poets, etc. The South European species is *Cicada orni*.

2. *Entom.* A genus of *Acridiidae*, or short-horned grasshoppers, typical of the orthopterous subfamily *Tettiginae*;……

と記すが、(a) に属する cricket が (c) も表し、(b) に属する locust が (c) も表し、(c) に属する tettix が (b) の一部も表す事は、(c) が (a) (b) と混同される事があった事を示してゐる。

grasshopper は short-horned grasshopper (*Acridiidae*, バッタ科) と long-horned grasshopper (*Tettigoniidae*, キリギリス科, 旧称 *Locustidae*) とに分れるが、前者のよく発声するものは (b) に準ずるものと見てよい。OED は tree の複合語の項で、tree-cricket を a cricket of the genus *Ceacanthus* とのみ解して、cicada の別名の意を記さないのは不当である。Cassell's New Latin Dictionary (1961) が cicada を a cicada, or tree cricket と解する例もある (註 9 参照)。OED は balm-cricket を the cicada とし、ドイツ語 Baumgrille⁽¹¹⁾ (直訳して tree-cricket) の誤訳と註してゐる。ともかく、cicada を grasshopper と見る外に、cricket と見る考へもあったわけである。cicada (cicala, cigala も) は Johnson に見えないが、OED によれば、15 世紀の訳文に cigade が見える外は、cigada は 1813 年の例が初出である (cicala は 1821 年に初出例)。1623 年に cigales,

1653年に cigals, 1768年に cigala の例が見えてゐる。

フランス語 cigale は、蟬を本義としており、Robert 並びに Robert² はその義の例として、La Fontaine, Fables の La Cigale et la Fourmi の例と、Daudet, Lettres de mon moulin の Les deux auberges の例を挙げてゐる (Littré, DGLF も La Fontaine の同一例を挙げる)。南仏人の Daudet の例は正しく本義であるが、蟬のみない Champagne で生れ、同じく蟬のみない Paris で活動した 17 世紀の La Fontaine は、実際には蟬を知らなかったはずであり、この cigale は蟬と解しないのが妥当である。GLE が cigale の条で、

Les cigales sont souvent confondues par des auteurs avec les sauterelles; ainsi dans La Fontaine, dont la cigale est la grande sauterelle verte (Tettigonia viridissima). Très commune dans les régions méridionales, les vraies cigales ont été chantées par les poètes de ces régions, tandis que, dans le Nord où elles manquent, on a chanté les sauterelles stridulantes.

と記すのはほぼ妥当であるが (LVS にも同様の説明)、La Fontaine の cigale を Tettigonia viridissima 或はキリギリスの類に限定するのは狭く、コホロギの類の可能性も認めるべきである。現に、架蔵本 (Alfred Mame et Fils, Editeurs, Tours, 1874) の挿絵 (K. Giraldet) にはコホロギの類と蟻が画かれてゐる (コホロギ類は背腹 (上下) に平たい体形、キリギリス類は左右に平たい体形⁽¹²⁾)。尚、tettigonia (<tettix) はラテン語では小さな蟬の一種を表すにも拘らず、学名としてはキリギリスの類を表す様になってゐる事に注意すべきである (Tettigoniidae も参照)。因に、Heyses Fremdwörterbuch (1919) は蟬をコホロギと似た虫 (ein der Grille ähnliches Insekt) としてゐる。Baumgrille といふ呼び方もあるのである。Fables の cigale は蟬と訳されるのが例であるが、誤とすべきである。管見によれば白水仏和のみが Fables の cigale をキリギリスとしており、他の仏和辞書は (小学仏和も) 蟬の意を記すだけである。

ドイツ語 Zikade (Cicade, Cikade) はラテン語 cicada に由来し、本義は蟬であるが、コホロギに似る (grillenähnlich)、キリギリスに似る (heuschreckenähnlich) と言はれる如く、古くはコホロギ或はキリギリスの意に用いられる事が多かった (ドイツ語圏では蟬は南部に限られる)。Goethe の Faust 第一部 Prolog im Himmel (287-290 行)、

Er scheint mir, mit Verlaub von EW. Gnaden,
Wie eine der langbeinigen Cicaden,
Die immer fliegt und fliegend springt,
Und gleich im Gras ihr altes Liedchen singt;
に対して森鷗外訳は、

まあ、お前さんの前だが、飛足のある虫の中の / 蟬と云ふ奴のやうに / 飛んだり跳ねたりばかりしてゐて、 / 直ぐ草の中に潜つては昔の儘の歌を歌ふ。

高橋健二訳は、

だんなの前で恐縮ですが、私には人間が、 / 足の長いバツタのように思えるんです。年じゅう飛んだり跳ねたりして、 / すぐ草の中にもぐって昔かわらぬ小歌を歌うバツタのようにね。

高橋義孝訳は、

あなたの前だが、この人間というやつは、 / いつも飛んだり跳ねたりしてはいるが、 / たちまち草の中にもぐって昔ながらの歌をうたう / 肢の長い蝗虫のように思われてならない。

とあるが、Cicade の訳が問題である。

両高橋が Cicade (通行本では Zikade) をバツタと訳すのは、これが Heuschrecke に当るとされる事が多いからであらう。Heuschrecke (Heu の古義は草, schrecken の古義は跳ぶ) は grasshopper とほぼ同義 (同原義) で、バツタの類とキリギリスの類に分れるが (広義にはコホロギの類も含む)、この Cicade が Heuschrecke に当るとすれば、singt (歌ふ) とあるので、キリギリス又はコホロギ (の類) と解すべきである。バツタの類は発声はしても、一般に歌ふといふ感じではない。

Grimm は Zikade に就て、本義を蟬とするが、Grille, Heimchen を表す事もあるとして既掲の Faust の例を挙げてゐる。処で Grille に於ては普通はコホロギの類を (gryllidae) を表し、主として、Hausgrille (Heimchen), gryllus domesticus と Feldgrille, gr. campestris に分れるとし、時には Heuschrecke や Zikade などの代りに使はれる事もあると述べてゐる。Grimm は Faust の Cicade を Grille と解するが (鷗外訳の蟬はコホロギ)、<immer fliegt und fliegend springt> はコホロギよりはキリギリスに適する表現であるから、キリギリスと解するのが妥当である (Grille は Heuschrecke を表す事もある)。尚、イソップ物語の cicada (ラテン語) を Grille とするものと Heuschrecke とするものとがある事からも、ドイツ語でもコホロギやキリギリスに解した事が分る⁽¹³⁾。

さて上記を要約すれば、英語 cicada, フランス語 cigale, ドイツ語 Zikade はラテン語 cicada (蟬) に由来するが、欧州に於て、イギリスの殆ど全部、フランス語圏・ドイツ圏の大部分 (主要部) には蟬は棲息しないので、それらの非棲息地では、cicada, cigale, Zikade それぞれの使用度が高くはなく、必ずしも正確に用いられてはゐなかった、といふ事になる。蟬の棲息するアメリカでも、cicada は普通の用語ではなく、locust が多用されるのである。

最後に、和訳に関して述べておく。

例のイソップ物語で、「セミとキリギリス」とするのは、英語の和訳としては誤訳とは言へない（英訳そのものは誤訳）。山本光雄訳「イソップ寓話集」（1974年改版、Chambry版のギリシヤ文による）では「蟬と蟻たち」となっている。La Fontaineのcigaleは、代表的なフランス語辞書が全て蟬と認めてゐるので、此を蟬と訳してもよささうに見えるが、La Fontaineの意には相違する故、コホロギ、或はキリギリスと訳すべきである。FaustのZikadeを岡高橋がバツタと訳すのは、ZikadeはHeuschreckeであり、Heuschreckeはバツタであるといふ考へに基くものである。Heuschreckeはバツタであるとする狭い見方は古い独和辞書に共通な誤であって、例えば木村相良独和旧版（1940）は「直翅目、ばった」としてゐる。この辞書の相良編、新訂版（1963）は「直翅（ノ）類（ばった・いなご・かまきり・こおろぎなど）」と改めてゐる（相良大独和（1958）に基く）が、カマキリを除き、キリギリスを加へるべきである。独和広辞典（1986）は「バツタ・イナゴ」と旧態依然である（Zikadeの古義をキリギリスとするのは三修独和と同じで、他の独話辞書が単にセミとするのよりはよい）。現代ドイツ語では、Heuschreckeは狭義には（本来は）バツタ・キリギリスの類を表して、広義にはコホロギの類も含み、Grilleは狭義には（本来は）コホロギの類を表して、広義にはキリギリス（バツタ）の類も含む事が、ドイツ語辞書により知られる。

二 諸家の誤訳

元来、人の誤訳を指摘するのはつまらない事である。少くとも、好んですべき事ではない。然し、誤訳公害といふべきものが、一般社会のみならず、学界にも充満してゐる現状では、多少の時間を割いて是正の微意を表すのも、無意義ではないであらう。僅かな紙面に限られ、多くを語るを得ないが、語学の基本に触れる問題をいささか説き得たと思ふ。先づ三名の訳者に就て簡単に述べておく。

上田敏、前田晁、石井桃子

上田敏は名訳を謳はれて来たが、彼の訳は果して名訳であらうか。例へば、VerlaineのChanson d'automne（秋の歌）を「落葉」と訳し、その一節、

Les sanglots longs/Des violons/De l'automne/
Blessent mon cœur/D'une langueur/Monotone.
を次の如く訳してゐる。

秋の日の/キ・オロンノ/ためいきの/身にしみて/
ひたぶるに/うら悲し。

原詩の絶妙な押韻(aabccb)の効果を伝えるべくもないのは措くとして、果してこれが名訳であらうか。sanglotは「すすり泣き」である。violon即ちviolinの音は、すすり泣きを思はせるものがあるが、「ためいき」とはほど

遠い。重大な誤訳である。又、「うら悲し」は「何となく悲しい」位に当るのに、これを「ひたぶるに」と強調するのは違和感を与へる。此等の二点によつても名訳とは認められない。

前田晁訳「クオレ」（岩波少年文庫、1955）は岩波文庫版の改訳である。原文はAmicisのCuoreであるが、前田は英訳本より訳し、佐々木薫一が「全部をイタリアの原書とくらべて見てくれた」と「はじめに」にある。不適當な訳が多いが、甚だしい一例を次に挙げる。

家に帰るときには、すっかりしわくちゃになって、
どのところなどすっかりはだけているが、（上、119頁）

e ritorna a casa ogni giorno arruffata e sgolata,
小学一年担任の若い女教師が、一心不乱に児童の世話をした後で帰宅する時の事を述べたものであるが、これでは殆ど意味をなさない。「すっかりしわくちゃになって」はarruffataに対し、「どのところなどすっかりはだけて」はsgolataに対するが、この二語は夫々arruffare, sgolareの過去分詞（形容詞性）の女性形である。前者は「髪を乱す」に、後者は「喉を使ひすぎで声をからす」(s= out, gola= throat)に当る。前田訳は簡潔な原文に対して冗長であり、しかも完全な誤訳である（ogani giorno（毎日）の訳も落す）。翻訳とも言へない悪訳を見すごした岩波側にも責任がある（根本的には原文から訳せない者に任す事が問題）⁽¹⁵⁾。

石井桃子には多数の児童書の翻訳があるが、不正確な点が多く、特に幼児向きの本には恣意的改作さへある。例へば、オランダのDik BrunaのPoesje Nelの英訳Pussy Nellを「こねこのねる」として訳してゐるが、翻訳とも言へない部分が目立つ。次の冒頭部がよい例である。

ちいさいねこが おりました。/なまえはねると
いいました。/きれいなすかーとをはいてま
す。/ねえみてごらん、そうでしょう？

There was once a kitten/whose name was Nell.
/She lived in a farmhouse/and had plenty to
eat.

後半は勝手な作文であつて、英訳文には全く対応してゐない。英文には内容があり、絵を見ても分らない事が書かれてゐるが、和文の方は無内容である。絵本では、絵と文が相互補完となつてをり、絵を見れば分る事は文にしないのが鉄則であるにも拘らず、石井はネルの服装に就て述べてゐる（絵はネルの立姿を描く。ネルはワンピースの様なものを着てゐて、スカートをはいてゐるとは認め難い）。石井は絵本の要件を知らず、ただ幼児に分りやすい様にと、調子よく書いてゐるだけである。やさしい本で英語の基礎的学習をしようと思つて、訳本を参照する者にとっては、「いいかげんな訳なので困った」と

いふ事になる。世の翻訳者は、訳書が語学の勉強にも利用される事があるといふ面を、忘れてはならない。

別宮貞徳「誤訳辞典」「翻訳の初歩」「誤訳 迷訳 欠陥翻訳」

別宮貞徳は誤訳摘発者として有名で、雑誌「翻訳の世界」連載の「欠陥翻訳時評」を担当してゐる。彼は語学力に絶対の自信を持ってゐるわけではなく、自分の程度でも容易に気づく誤訳が世の中に充満してゐるので、黙ってをられないといふ趣である。彼が誤訳に対して正訳として示すものに、甚だしく不適当なものがそれ程多いはずもないが、不適当なものの例を若干挙げておく。

「誤訳辞典」(1983)に次の例が見える。

〔原文〕Its contents ascended the hierarchy through plants and animals, Man and his arts and sciences, supra-human 'intelligences', and so finally to God himself.

〔誤訳—252〕その目次は、動植物、人間と人間の芸術、科学、超人間的「知能」をへて、最後には神そのものにいたる階層までさかのぼっている。

intelligence は宗教的なコンテキストでは「天使」をさすことがある。ここは被造物を階層的に並べているので、人間の上にくるものは、当然「天使」ということになる。

中略

〔試訳〕その内容は、動植物から人間、その芸術・学問、人間を超えた「天使たち」をへて、最後は神そのものまで、階層を順次のぼっていく。155—6頁この文は intelligence による序列(下→上)を示してゐるので、plants and animals は「植物・動物」とした方がよい。arts and sciences は「芸術・学問」ではなく、「文科系・理科系の学問」である。Cobuild の art の項に、

Arts or the arts is also used to refer to subjects such as history or languages in contrast to scientific subjects. EG……education in the arts and sciences…… (=humanities ≠sciences)

COD の art の項に、

(in pl) certain branches of university or school study serving as preparation for later life or for more advanced studies, esp. languages, literature, philosophy, history, etc., as dist. from sciences;

(dist.=distinguished)

OALD に、

sth in which imagination and personal taste are more important than exact measurement and calculation: History and literature are among the arts/the arts subject (contrasted with science/science subjects).

(sth=something)

LDCE の arts の項に、

those subjects or fields of study that are not considered to be part of science, esp. as taught at a university: *History is an arts subject*

とある事を知るべきである。supra-human 'intelligences' は「超人間的『知性』(天使)」とでもした方がよい。尚「誤訳辞典」215—6頁に別宮自身の誤訳例が挙げてある。

「翻訳の初歩」(1980)では The mysterious Letter に関する箇所(54—66頁)を問題とする。泥棒が匿名で Green 夫婦に芝居のキップを届けて(「誰か分かるか」といふ書きつけも添へる)、芝居に行かせ、その留守宅に押し入って、妻君の宝石を盗んだ上に、「誰か分らないね」とからかふ置手紙を残してゐたといふ事件で、隣人の電話で駆けつけてゐた巡査も登場する。

キップに添へた書きつけに<Guess who sent you these tickets>とあるので、妻君が<perhaps it was that friend of yours at the office>と言った言葉を、「きっとあの人のよ。会社のお友だちの」(59頁)と訳すが、この場合「……ではないかしら」位に訳すべきである。perhaps は「場合によってはあり得る」事を表すのが本義であって、客観的現象に就ては本来は精々50%位の可能性を表す事に注意すべきである。ただ、抑制的表現では、perhaps は50%をある程度越す可能性をも表し得、殊に非客観的現象に就ては100%にかなり近い可能性をも表し得るが、この場合は客観的現象であるから、「きっと」と訳すべきではない。

<the street where they lived>に就て、

「住んでいる国」「住んでいる町」はちっともおかしいのに、「住んでいる通り」となると妙な感じがしてくる。なぜかはっきりとは説明できないのですが、要するに語感というものなのでしょう。「自分のすまいのある通り」としておけば、その違和度をのがれられそうです。

と述べるのは、誤訳ではないが、説明がをかしい。単に「通り」と言えば道路を表し、街を表さないで、「住んでゐる通り」とは言へないのである(地名に用ゐられた「通り」は街をも表し得る)。street は通りも街も表し得る(漢語の街は、十字路の意が原義で、大通り、マチを表す)。<You didn't forget to turn the lights off, did you?>(夫が妻に尋ねる言葉)を「消してくるのを忘れたんじゃないのか?」(62頁)と訳すが、二人は一緒に家を出たのであるから、確か明りは全部消したはずなのではないかと思ひながら、「明りを消すのは忘れなかったね」と念を押したと解すべきである。

Mr. Green stop the car and they go out. A policeman was standing in front of the house.

"Are you Mr Green, sir?"

"Yes, I am. But what...?"

"I'm sorry to tell you that burglars have broken into your house this morning. A neighbor of yours called us an hour ago."

When Mr. and Mrs. Green went into the house, they found the burglars had scattered everything, and stolen Mrs. Green's jewels out of her jewel-case. How surprised they were!

The policeman took a piece of paper out of his pocket and showed it to Mr. Green. "Does this mean anything to you, sir? I found it on the table in the living room."

Mr. Green read the letter aloud: "You can't guess who sent you the tickets, can you?"

..... (63 頁)

に対して、次の如く訳されてゐる。

グリーン氏が車を止めて外に出ると、家の前に巡査が立っていた。

「グリーンさんですね」

「ええ、そうですが、何か?」

「いえね、お宅に今晚どろぼうが入りましてね。隣の方から署に電話があったのが一時間前です。」

夫妻が中へはいると、どろぼうのしわざで何もかもばらまかれ、夫人の宝石箱から宝石が盗まれていた。それを見た2人の驚き!

巡査はポケットから紙切れを出してグリーン氏に示した。「これ、何か意味があるんでしょうかねえ。居間のテーブルの上にあったのですか」

グリーン氏は声に出して読んだ。「送り主が誰だかあたりませんでしたね」..... (64, 65 頁)

「グリーン氏が車を止めて外に出ると」では夫だけが外に出た事になるから、「外に出る」の主語を「二人」と明示すべきである。種々の配慮からかう訳したのであろうが、この場合の主語省略は適当ではない。65 頁に

巡査が 'I'm sorry to tell you that...' と言っているのを、そのとおり「お気の毒ながら〜」と訳す必要は必ずしもないと思います。習慣ないしはきまり文句のようなもので、正直に訳したために、外国の巡査はずいぶんいいで礼儀正しいという強い印象を与えては、かえって、妙なことになるかねません。

とあるが、儀礼的な <I'm sorry...> にも実感がこもる事も多く、「お気の毒ですが...」「とんだことですが...」などと訳しても構わない（「お気の毒ながら」は堅く、「いえね」は大したことではないと言ひたけな芝居じみた言葉で、この場合不適当）。気の毒で言ひにくいといふ気持ちをこめて「実は...」と言ふ事もあるだろう。「どろぼうのしわざで何もかもばらまかれ」は不自然な訳であ

る。このあたりは、もっと原文に忠実に訳しても、臨場感が出るはずである。「送り主が誰だかあたりませんでしたね。」は誤である。盗られた今でも誰だか分からないだらうとからかってゐる事を知るべきである。

細かく言へば、まだ色々あるが、略しておく。こなれた日本語にしようとして、却って的外れになる傾向が見られる。玄人じみた訳をしようとする処に落とし穴がある。尚、「『夜盗』は教科書の注に書かれている訳で、『どろぼう』で結構」(64 頁) は不当でないが、burglar に就て一言しておく。これは、古くは「重罪(盗に限らない)を犯す意図で住宅に夜間押し入る〔入った〕者」を表すが、今では広く「重罪を犯す意図で建築物に押し入る〔入った〕者」を表してゐる。WNWD は、burglar を <a person who commits burglary>, burglary を <1. the act of breaking into a house at night to commit theft or other felony 2. the act of breaking into any building at any time to commit theft, some other felony, or a misdemeanor> と釈してゐる。COD は 5 版までは古い意味だけを記すが、6 版 (1976) からは、burglar に <One who enters building illegally (in Engl. law formerly by night only) with intent to commit felony> としている (CED は <before 1969, by night> とする。)

次に「誤訳 迷訳 欠陥翻訳」(1981) 236—7 頁が <What colour is a brown bear?> に就て、

brown bear はクマの種類だが、色の名前がはいっているのがミソ。……それなら、日本語でも、クマの種類を示しながら色名のはいているものを持ってくればいい。ぼくは「シロクマは何色か」と訳した。

と記す事を問題とする。この英文は、子供(子グマ)相手のとぼけた質問であって、必ずしも忠実な訳文である必要はないので、この訳は不適当とはいひ難いが、brown bear がヒグマを表す事と、ヒグマの俗称がアカグマであった事を考慮すれば、相手次第では「アカグマは何色か」が適訳という事になる(方言によっては、アカグマの称が完全に亡びたわけではあるまい)。赤色の感じは必ずしも伴はなくても、茶色系統の色をアカイと言ふのは、古来のならはしであって、やや古風か方言風であっても、アカ靴・アカ牛・アカ犬・アカ馬などに、そのなごりが認められる(殊に獣類の毛に純粹の赤色はないがアカ毛の称はある)のである。現代でもアラスカアカグマという一種のヒグマををり、単にアカグマとも言はれてゐる。因に、シロクマは北極熊と呼ぶのが正式である。これは成長するに従って黄色みを帯びてくるし、アメリカ黒熊などに体色の白い型もある事から、専門的には「シロクマ」は用ゐられなくなりつつあるといふ。

上記の書に関しては、誤訳らしい誤訳を指摘するのは

やめて、いささか趣を変へてみた。

W. A. グロータース, 柴田武「誤訳」

この本(1967)の「あとがき」に次の様にある。

この本が翻訳書だといっても、あらかじめ Willem A. Grootaers: Mistranslation といった原書があって、それを訳したいというものではありません。

著者は、十数年の日本滞在によって、日本語をほとんど不自由なく、いや、かなり細かいことまで理解でき、表現もできます。しかし、それは聞くこと、話すこと、読むことであって、書くことになると、やはり不自由のようです。また、事がらが事からですので、話しことばでは、十分に、詳しく表現できないということもあります。そこで、まず、著者が英語でタイプし、それを訳者が日本語へ訳し、できた訳文を著者が目を通し、問題になるところは徹底的に討論して、邦訳の定稿を作るという手順をとったのです。

著者の母語はオランダ語とフランス語ですから、英語で書くということは、著者にとって外国語で表現することです。(後略)

本文には不相当と思はれる箇処が散見するが、その幾つかに就て次に述べる。例へば

キリスト教関係のことばも、そのうち、ほんのいくつかのものは日本語の翻訳語として定着しつつある。アウグスチヌスの Confessions を「懺悔録」とか「告白録」とか訳すのは、ジャン・ジャック・ルソーの Confession の場合は正しいが、アウグスチヌス時代の Confession は「神を賛美すること」の意味である。高橋巨『聖アウグスチヌス「告白録」講義』(理想社 昭四一)が「賛美録」と訳している(七ペ)のは正しかった。

学生たちが岩波文庫の『^{ティヌス}アウグス告白』を手にとって、これは「罪人の告白」かと思って読みだすと、神の賛美に終わっているのを知って失望するらしい。だから、英国の Edward the Confessor 王を「懺悔者エドワード」と訳すのはまちがいである。Confessor は神の御業を告げる者という意味だから「証聖者」と訳すべきである。

『オックスフォード・キリスト教教会辞典』を見ると、Confession のこの意味について、次のように説明している。

CONFESIONS OF ST. AUGUSTINE, The. 紀元後四百年ごろに書かれた。この題名の意味は、聖書の confessing すなわち「神を賛美する」という意味で、現代語における「告白」の意味ではない。

これがこの単語の真の語源である。こういう語源の知識が翻訳の際に不可欠のことでもある。(112—13 頁)

とあるのは不正確である。

Oxford Dictionary of the Christian Church (1957) 即ち ODCC の原文は次の如くである。

written c. 400. Its title is to be taken in the Biblical sense of 'confessing', i. e. 'praising', 'God', rather than in its modern meaning of 'avowal', the work being St Augustine's thanksgiving for his conversion. ('praising', 'God' は 'praising God' の誤か)

処が、同辞典の CONFESSION の条には、

(1) A tomb of a martyr ('confessor') (2) The profession of faith made by a martyr or confessor (e. g.), and so in general a declaration of religious belief. From this sense derives its use for a communion, or religious body. (3) An acknowledgment of sin,

とあり、confession に「神を賛美する」意味が記されてゐないのに注意すべきである。Americana の CONFESIONS OF SAINT AUGUSTINE の条に、

St. Augustine's *Confessions* is not, as so many people imagine, an account of past deeds and, above all, not an avowal of youthful transgression as such. The word confession is used in the Biblical sense of the Latin word *confiteri* as an acknowledgment. Augustine's *Confessions* is quite literally the acknowledgment of a soul forced to admire the action of God within itself, though it has to admit the many obstacles that it placed in the way of Divine influence.

とあるのは明快である。ODCC の avowal は avowal of youthful transgression (若き日の逸脱・過ち・罪の告白)であり、praising God は acknowledgment of a soul forced to admire the action of God within itself (魂のうちに感じる神の御業を賛美しないではをられない魂の告白)なのであるから、舌足らずの表現であり、カトリックの神父グロータースを惑はす事にもなったのである。

confession は元来「事実をありのままに、隠しだてせず述べる事、告白、白状」であって、種々に用ゐられ、告白の対象は善悪いづれでもあり得て、対象が悪であれば、「罪の告白」等であり、宗教用語としては、上記の辞典の語解(3)に当る事にもなるのである(一般的には告白の対象が悪乃至不快事である傾向が著しい)。

confessor に就ては、ODCC よりは Britannica の次の説明の方が詳しい。

a word used in the Christian Church to denote (1) a male saint who is not included in any of the categories martyr, apostle, evangelist; (2) a

priest empowered to hear confessions.

(1) In the early church the title was restricted to those who had suffered persecution and torture, though not actual death, for the faith, but after the ages of persecution it came to be applied to those who had lived a holy life and died in peace. From about the 4th century persons so honoured became objects of cultus. As in the case of "saint", the right of declaring the holy dead to be "confessors" was ultimately reserved to the Holy See in the west; King Edward of England thus was made a "Confessor" on his canonization by Alexander III in 1161. (2) ……

ODCCは語解(1)に就て<one who suffered for confessing his or her faith, ……>とするが, saintとされるのは男性に限られる。「カトリック大辞典Ⅱ」(1942)の「証聖者(♂) confessor」の項にもかなり詳しい説明がある。confessorに就て, 小学大英話の語解3は,

証聖者, (正教会で) 表信者: 殉教はしないが迫害や拷問に屈せずキリスト教への信仰を宣言しそれを守った男子。

とし, 研究大英話は, 語解4で証聖者として, 「殉教はしなかったが, 迫害に屈しないで信仰を守った特に男子の聖人」と釈してゐる(日本国語大辞典等の国語辞書には証聖者の項はない。)

以上で「誤訳」説の不備が知られた事と思ふ。confessは飽くまでも「告白する」「信仰を表白する」であって, 「神の御業を告げる」「神を賛美する」を直接に表すのではない。

次は, 英訳がすでに誤訳し, その英文を邦訳でさらに誤訳した「二重誤訳」である。これは, 前と同じくらい罪は重い。アンネが友だちとの交際について反省しているところだ。

「たぶん, わたしはひとを信頼する気持に欠けているのでしょうが,」(一三・上ページ——二)

とある。英訳では Perhaps I lack confidence, で, これは, 訳せば,

「たぶん, わたしには自信がないのでしょうが,」となる。ところが, オランダ語の原文では, 「信頼」「自信」と訳されていることばは *vertrouwelijkheid* (ドイツ語の *Vertraulichkeit* に当たる) で, 「心を打ち明けてつきあうこと」の意味である。だから, 正確には,

「心を打ち明けてつきあえる人がいないのは, たぶんわたしのせいでしょうが,」

とでも訳すところである。(58頁)

とあるのも不正確である。⁽¹⁶⁾

アンネは, 本当の友達(心をひらいて腹藏なくつきあ

える人)が無いのは, 人に不信感を持たないうちとけた気持(それに基いた態度)が自分に欠けてゐるからではなからうか, と思つてゐるのである。この場合, confidenceは不当な用語ではない。OEDは confide (>confidence) に就て,

1. *intr.* To trust or have faith; to put or place trust, repose confidence in (…). 4. *trans.* To impart as a secret, to communicate in confidence (to a perso) .

confidenceに就て,

1. The mental attitude of trusting in or relying on a person or thing; firm trust, reliance, faith. 6. The confiding of private or secret matters to another; the relation of intimacy or trust between persons so confiding; confidential intimacy. 7. A confidential communication.

と記すが, 「心を打ち明けてつきあうこと」は confidence 語解6(7)に当つてゐる。confidenceは self-confidenceを意味する事もあるが, 訳文の confidenceを「自信」と訳すのは誤訳である。是はグロータース・柴田の英語力不足を示すものである。「ひとを信頼する気持」は confidence 語解1に当り, 不完全ではあるが, 誤訳とふ程ではない。アンネの *vertrouwelijkheid* は, confidence 語解6よりは, 誤解1に当つてゐる。語解6に当る関係が無いのは, 語解1に当る気持・態度が無いからではなからうかと思つてゐるのである。「心を打ち明けてつきあえる人がいないのは, たぶんわたしのせいでしょうが」の訳は不適當である。「たぶんわたしのせいでしょうが」では, 「わたし」の何が原因であるか明示してゐない事になって, 原意にそはない。又, 蘭語 *mis-schien* (英語 perhaps) をこの場合「多分」と訳するのが適當かどうかといふ問題もある。

他にも批判すべき点(フランス語発音に就ても)多いが, 省略しておく。言語の理解は洞察である。上記の僅かな例によつても, グロータース・柴田に洞察力の欠ける面がある事は知られた事と思ふ。

註

- (1) 天草本(ローマ字書き)は Planudes ラテン訳の和訳。国字本はラテン文の訳乃至重訳と推せられる。
- (2) ギリシャ文も翻訳に係るものがある。
- (3) 4種の国字本伊曾保物語に次いで古いイソップ和訳本は明治5年(1872)の渡部温「通俗伊蘇普物語」で, 原文は英人 Thomas James の *Æsop's Fables* である。これでは Grasshopper がキリギリス(漢字で表記)と訳されてゐる。尚, OEDは grasshopperの項で, ラテン語 *cicada* を a grasshopper と訳す15世紀の例を挙げ, 1692年に <An Ant and a Grasshopper> (The Fables *Æsop*) の例があ

る事を示す。

- (4) Liddell, Scott 編の A Greek-English Lexicon の Jones による改版 Part 9 (1936) は tettix に就て、
cicala, *Cicada plebeia* or allied species, a winged insect fond of bgsking on trees, when the male makes a chirping or clicking noise by means of certain drums or 'tymbals' underneath the wings, と記し、記述が正確になってゐる。OED の *Cigala* の項の引用詩 (1824) <Still as we pass, from bush and briar, The shrill cigala strikes his lyre.> は記述が不正確。
- (5) Britannica は <One species occurs in the southern countries of England, but is rare; 170 species are known in the United States.> と記す。OED に於る *cicada* の項の 1819 年の引用文に、英国棲息の蟬の唯一種は最近発見されたものとある。
- (6) 後述の様に、フランス語 *cigale* は grasshopper を表す事がある事に注意。
- (7) 後述の様に、ラテン語 *cicada* が cricket (コホロギ) と訳された事もある。
- (8) (a) (b) の相違を知る人は多くないし、鈴虫・馬追が (a) (b) のいづれに属するか直ちに答へ得る人は少い。日本国語大辞典は「こおろぎ」に就て「古く、秋鳴く虫の総称」とするが、「コホロギ」がキリギリス類を表す確実な例は古典にはない (現代方言ではキリギリス・イナゴを表す例もある)。古典にはコホロギを表す「キリギリス」なる語が散見するが、寧ろ「キリギリス」が「秋鳴く虫の総称」であつたと解すべきであらう。古典にはキリギリスの現れる確実な例はない。「キリギリス」「コホロギ」は古典に現れ、擬声語と推せられる。
- (9) Webster が *cicala* に *cicada*, grasshopper の両義を認めるのは注意すべきで、OED は *cicala* に grasshopper の意を認めてゐない。Penguin は *cicala* に grasshopper の意のみを認め、*cicada* は the tree cricket としてゐる。*cicala* を載せない辞書も多い。WNWD は *cicala* を *cicada* の詩語としてをり、又 *cicada* を any of a family (*Cicadidae*) of large flylike insects とするが、米国に於る *cicada* の別名が harvest fly である事を思はせる。以上によつても辞書に相違がある事が知られる。
- (10) locust はもとバッタの類を表すとあるが、この原語であるラテン語 *locusta* は grasshopper に当り、本来バッタ類に限定されず、キリギリス類も表した語である。grasshopper の中、バッタ、殊に飛蝗 (単に蝗とも言ふ。農作物に大害を与える。日本では、稲作に大害を与へたイナゴが誤つて蝗と同一視された) が特別に関心を引くので、英語では、当初は害虫としてのバッタ、殊に飛蝗を表した。Johnson は locust にこの意味のみを認めてゐる。但し、Johnson は grasshopper を載せず、又 cricket に cricket on the hearth と表現される house-cricket (*Acheta domestica*) の意のみを認めるなど (dragonfly を fierce stinging fly とするの一面的)、自然に就ての知識が偏狭の様である。locust が蟬の意を獲得したのは、*cicada* なる語を知らない英国人が米豪等の新天地に渡つて始めて蟬を発見し、

彼等が知つてゐる語の中 locust を選んで附けた事によると推定される。

- (11) OED の balm-cricket の項は、1783 年の Latin Dictionary に <Cicada, a sauterelle, or, according to others, a balm-cricket> とあると記してゐる。上記の sauterelle は OED の見出し語にはないが、註 12 に示す様にもフランス語。
- (12) sauterelle に就ては Robert に、
 Nom donné à tous les orthoptères sauteurs, acridiens, locustidés, grillons…
 a) Locuste. *Grande sauterelle verte*, appelée improprement (*cigale*) .
 b) *Par ext.* Criquet, et *spécialt.* Criquet pèlerin.
 とある。sauterelle は sauter (跳ぶ) に由来するので、キリギリスの類の意から、バッタの類、コホロギの類を意味するに至つたのは自然である。Grande sauterelle verte, *Tettigonia viridissima* (旧称 *Locusta viridissima*) が俗に *cigale* と誤り呼ばれる事を認めながら、La Fontaine の *cigale* を誤用としなかつたのは、代表的な古典作家がかかる誤用をするとは思はなかつたか、さう思ひたくなかつたからである。Locuste に就ては Robert に、<*Zool.* Autre nom de la grande sauterelle, scientifiquement appelée *locusta*.> とあるが、本来は広義で、Littre に <Terme de zoologie, genres d'insecte plus généralement appliqués sauterelles.>、DGLF に博物学名として <Insecte dit vulgairement sauterelle.> とある。
- criquet (擬声語) に就て、Robert はバッタの類とするのみ (<applé scientifiquement *acridium* et vulgairement, mais improprement, *sauterelle*>) であるが、DGLF は、バッタの類を表す本義の外に、コホロギ (*grillon* と同じ) の意を示し、Littre もバッタの類の意の外に通俗的にはコホロギの意があるとしてゐる。Littre は 13 世紀の例として、<Or me dites, sire crequet [*cigale*], …> の crequet を挙げるが、これは La Fontaine と同様にイソップに基いたものであつて、蟬を意味するラテン語 *cicada* (又はギリシャ語 *tettix*) を誤解して、crequet (コホロギ) と訳したに過ぎないと考へられる。A (例えば *cigale*) を B (例えば *criquet*) と呼ぶ場合、A の実体を知つた上であれば、B の転用と言へるが、A の実体を知らないままであれば、単なる誤解であり、誤用である。この場合 crequet は誤訳であり、誤用である。DGLE に *criquet* が古フランス語で *cigale* を表したとあるのも不正確である。GEL の *cigale* の項は、「La Fontaine は我々が今 *Criquet* と名づけているものを *cigale* と呼んだらしい」とするが、この *criquet* はコホロギを指すのであらう。*cigale* をコホロギと解する説もあるのである。英語 *cricket* はフランス語 *criquet* に由来するが、OED が Used for *cicada* として挙げる

Earl Derby, *Homer's Iliad rendered into English blank verse* (1864) の cricket は単なる誤解に基くものであらう。蟬の実体を知った上で、それを cricket, tree cricket などと言ふのであれば、転義が起った事になる。Webster は cricket に就て本義を挙げる外に、その他の昆虫、特に grasshopper を表す事がある（但し普通は修飾語つきで）としてゐる。フランス語 grillon はラテン語 gryllus (コホロギの類及びキリギリスの類を表す) に由来し、コホロギの類を表す。Littré は 15 世紀の <Es fables des anciens est plus prisee la formis que le grillon [cigale] ...> の例を示すが、これは例のイソップの物語であって、この grillon はコホロギを表したと見るのが妥当である。

結局、英語の場合の様に、フランス語でも、蟬がキリギリスやコホロギと混同される事があった事になる。crequet はコホロギと一往解したが、キリギリスの類かも知れない。sauterelle はバッタ・キリギリス・コホロギの何れでもあり得る事から見ても、criquet がバッタ・コホロギの外にキリギリスであり得ても、不自然ではない（英語 cricket も grasshopper を表し得る）。

(13) Grimm は Zikade の項で、<singzirpe, saugt an baumen> などと記し、種々の文献から引用してゐる。

im 18. jahrh. wnrde zikade in unsere poetische sprache eingeführt und auch auf die heimischen grillen übertragen (Seiler, 1895-1912)

と記した後（「18 世紀に単語 Zikade が詩言語に導入されて、国産の昆虫 grille に当てられる事にもなった」）、

vorher melden es vocabulare und wörterbücher in sachlicher ungenauigkeit

と述べて（「その前は語彙集や辞書が蟬に関する不正確な情報を伝えるだけであった」）、

cicada est vermis cantans de nocte in parietibus domuum, grillen oder treck wibel oder heuschreck (1475) [cicada は夜間屋内で歌ふ虫である, grille (コホロギ) 或は treck wibel (Reutlingen の方言), 或は heuschreck (キリギリス)]

<cicada...ein heimken (イヘコオロギ)> (1495), <...ein gryll (コホロギ)> (1508),

cicada arguta por la cigarra que canta, graece acheta (1555) [「歌ふ cigarra (スペイン語で蟬)」に相当する cicada arguta (歌ふ cicada, 声の好い蟬), ギリシャ語で acheta (声の好いもの, 歌ふ蟬)]

achetae sind kleine thiere mit vier fluglen, sechs fuszen, in welsch und latein cicadae, werdend in Teutschland nitt gefunden; etliche sagend muhenheim oder grillen (1556) (achetae (雄蟬又は蟬を意味するラテン語 acheta の複数形) は四翅六脚の小動物で、ロマンス語・ラテン語で cicadae (cicada の複数形) に当

り、ドイツ語では見出されない。muhenheim (Zürich 方言) とか grillen (コホロギ) とか言ふ人がある]

などと引用してゐる。ラテン文 <Cicada foris, gryllus domi cantillant (蟬は屋外で、コホロギは屋内で歌ふ)> を、<die heuschrecken singen draussen, die heimeken daheime> (1638) 及び <die feldkrille singet und kirret draussen zu felde, und die Haime zu hause>

(1643) と訳す例も興味がある (heuschrecken はキリギリス, feldkrille は field cricket, heimeken, Haime は house cricket に当る)。ラテン語 cicada がコホロギやキリギリスに当てられた事か上記で知られる。cicada に由来するドイツ語 cicade が、蟬のゐない地域ではコホロギやキリギリスを表し易かった事が推せられる。aceta に就て、Webster は最終的には Doric Greek に由来するとするが、Attic Greek に由来するとすべきである。ラテン語までは雄蟬を表した acheta か、学名としてはコホロギ (a genus of crickets) を表すに至ったのは、蟬の一種を表した tettigonia がキリギリスを表すに至った事と似てゐる。

Grimm は Grille に就て次の様に言っている。単語 grille (古くは grill) は中世後期までは Bayrisch-Ostfrankisch に限られてゐたのが次第に広がって行った。grille の使用には、例のイソップ物語との関連が考へられる。grille をラテン語 cicada と解したり、cicada を grille と解したりする例が見られた。<grill, grille, f., cicada, gryllus, locusta> (17 世紀後半) の例などがある。Grimm は <bedeutung> の条で、

wissenschaftlich bezeichnet grillen oder grabheuschrecken die gryllidae, eine familie der geradflügler...für dialect und literatur kommen wesentlich nur in betracht die hausgrille (heimchen), gryllus domesticus, und die feldgrille, gr campestris, die hausgrille in alterer sprache vielfach in ungezieferlisten:.....

Von der Amais und dem grillen (de formica et cicada) STEINHOWBL ÄSOP 188; die ameise und der grill H. SACHS...

などと記してゐる。

Grimm は Grillchen に就て、auf eine person angewendet として、Raabe, Hungerpastor (1864) から、der shawl, in welchen sie sich frostelnd gehüllt hatte, war...verblichen, ganz, ach ganz und gar das arme grillchen ihres landsmanns Jean de la Fontaine

を引用するが、Raabe が La Fontaine の cigale を Grille と解してゐた事がこれにより知られる。

尚、コホロギを表す固有のドイツ語としては Zirpe などの擬声語系用語があり、Zirpe は蟬をも表し得る (Baumzirpe とも)。

Heuschrecke (die) はもと Heuschreck (der) であったか、複数形 Heuschrecken の多用から、Heuschrecke (die) が生じた (Grill > Grille も同様)。Grashupfer, Heuspringer, Heupferd の別名もあり、単に Schrecke とも言はれる。

Heuschrecke はバッタ、殊に飛蝗としては農業にとっては恐るべき存在なので、Schrecken (恐怖の対象) の連想が強くなってをり、跳ぶ虫の原義は忘れられてゐる。Grimm は次の文を引用してゐる。

eine schrecke *in specie est formido, vel simulacrum foeneum*. heuschrecke, cicada, locusta; er kennt die alte sinnliche bedeutung von schrecken=spiringen nicht mehr. (schrecke はその姿が恐怖の対象であり、乾草の化物である。heuschrecke はラテン語で cicada, locusta. heuschreck は schrecken=spiringen (跳ぶ) といふ古い具体的意味を、も早知らない。)

これにより、cicada (蟬) を Heuschrecke (キリギリス) と誤解した事が知られる。

Wenig は Grille に就て、

Eine Gattung kleiner Heuschrecken oder Grashüpfer; die Feldgrille oder der eigentliche Grashüpfer, die wirkliche Heuschrecke und die Hausgrille oder das Heimchen (auch Zirse, Zirke, Schirke usw.) と述べており (Heuschrecke に就ては 〈gleichbedeutend mit Grashüpfer, Heuspringer, Heupferdchen〉とする)、Feldgrille を本来の Heuschrecke として Hausgrille と区別してをり、Heuschrecke は広義では Hausgrille を含むが、狭義では (本来は) Feldgrille を指すといふ考へであつて、キリギリスとコホログとを明弁する知識に欠けてゐる (バッタとキリギリスの区別もしてゐない)。又 Breuel は

Zikade を grasshopper とし、cicada を die Heuschrecke, Zikade としてゐる。

(14) 例へば cicada に就て、OPD は〈a grasshopper-like insect that makes a shrill chirping sound〉と寧ろ幼稚な説明をするに過ぎず (日本人であればキリギリスやコホログの類の連想はしないだらう)、又 LASD にはこの語は見えない。

(15) 宮原晃一郎訳「愛の学校」(1955) では、

毎日お宅へお帰りになるときには、髪はみだれてしまふし、声は嘎れる。

矢崎源九郎訳「クオレ」(1957) では、

そうして、毎日家へ帰るときには、髪はばらばらに乱れ、喉はからからにかれ、

とあり、両者とも原文の簡潔さには及ぶべくもないが、甚だしい誤訳はない。前者の方が正確であるが、「声はかれてしまっている」とした方がよい (文脈から「喉を酷使して」の意はこめられる)。後者の「喉はからからにかれ」では、喉の極度の乾燥・かわきを言う様にもとれる。尚、名訳と言はれてゐる寿岳文章訳「ダンテ『神曲』」(1987) を批判する予定であつたが、割愛した。

(16) 文芸春秋の新訳「アンネの日記」(1986) 11 頁では、「ひょっとすると、わたしに人を信頼する気持ちが必要なのかもしれませんか」とある。perhaps は「多分」に当たらないと考えて「ひょっとすると」と訳したのであらうが、この場合これでは弱すぎる。